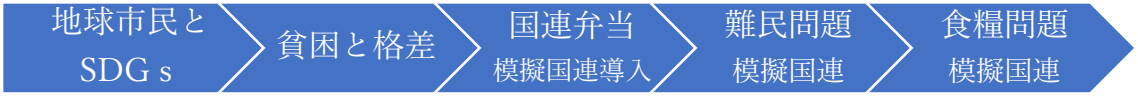
グローカル・ラーニングの実施

（1）グローカル・ラーニングについて

学校設定科目「グローカル・ラーニング」(1 単位）に加え、本校独自の「特設時間」をグローカル・ラーニング実施の時間と設定し、それぞれグローカル α・β として実施した。
グローカルαは 1 年から 3 年まで合同縦割りで展開し、グローカルβは学年ごとにそれぞれ 1 年はグローカル基礎 (Project Based Learning)、2 年はグローカル演習 (Personal Project Learning)、3 年はグローカル発展（Project Advanced Learning）を行う。
グローカルαはグローバルな社会課題について解決へ向けた提言を行う探究学習であり、グローカルβはローカルな社会課題をテーマとした学校プロジェクトや課題研究に取り組む探究学習である。グローバルな視点での探究学習（グローカル α）とローカルな視点での探究学習（グローカル β）を同時並行的に学習することで、3 年間を通して、国際的視点と地域的視点の間に同時双方向的な作用が発生し、2 つの視点の間を行き来しながら探究的な学びが螺旋構造的に高次に深められていく効果が期待できる。

（2）グローカルα　実施報告

開発教育をベースとして、課題解決型学習に取り組んでいくこのグローカル・ラーニングは国際人に不可欠な資質・能力を育成する本校の教育活動の根幹をなすプログラムである。SGH アソシエイト時から東北公益文科大学の先生方からご指導をいただきながらシラバスを作成してきたが、毎年ＰＤＣＡをしっかりと回し、生徒の実情も勘案し、学習内容を体系化し学習計画を構築している。
今年度の単元として以下の 5 つを行った。
１）地球市民と SDG s
２）貧困と格差
３）国連弁当
４）難民問題
５）食糧問題



１）　地球市民と SDG s

導入として、生徒たちが抵抗なく、むしろ楽しみながら課題について概況を知ることができるように、「もし世界が１００人の村だったら」「新・貿易ゲーム」「世界一大きな授業」などの既存の教材をベースに、担当者の青年海外協力隊としての経験を入れながら展開した。

また、ＳＤＧｓが包括的かつ統合的、融合的であることを理解し、かつ、自分たちの生活や行動との関連性を学ぶ「SDGｓと私たち」「SDGｓランキング」の二つのワークショップを開発して学習を行った。上級生は今までの探究学習の知見や問題意識をもとに SDGｓや地球的課題をとらえ直し、1 年生は疑似体験を通してリアルに地球的課題や SDGｓと私たちの生活について理解を深めた。

２）　貧困と格差

貧困と格差では世界の絶対的貧困についての状況を、アフリカを中心に学習し、その上で日本の相対的貧困について取り扱った。やはり青年海外協力隊の経験や活動を取り入れ、生徒たちが貧困をリアルに感じられるよう工夫した。また、グローカルな視点を養うために、ここでは日本の貧困に苦しむ子ども達の現状を知るためのジグソー法教材とシミュレーション教材を作成し、理解を深め、その上で海外の貧困対策・政策を調べさせながら、最終的には日本の貧困対策について政策提言をまとめ、発表した。また、この政策提言はその後行う模擬国連での政策考案の練習という全体の中での位置づけで行った。

３）　国連弁当（模擬国連導入）

本校では社会課題を多角的にとらえ、思考力や創造力、調整力等の技能を身につけさせるために、模擬国連に取り組んでいる。昨年度までは 1 年生であっても食糧問題などについて本格的に模擬国連に参加させていたが、彼らからの「いきなり本格的な模擬国連は負担感ばかりが大きく、抵抗感が増すので、簡単なものからなれていけるよう配慮があるべきだ」とのフィードバックにより、今年度は模擬国連へのハードルを下げ、興味・関心を高め、段階的に模擬国連に取り組んでいけるよう、初歩的な国連弁当を行った。これによって、1 年生は楽しみながら参加することができ、同時に模擬国連そのものはおろか、食糧問題をはじめとする諸課題についての興味も深まった。

また、議長も 3 年生にさせるなど、生徒のより主体的な態度を引き出しつつ、パーソナルスキルの向上を図った。

４）　難民問題（模擬国連）

本校では多文化共生社会の構築を目指す学校プロジェクトを行っているため、移民と関わりがある難民問題を取り上げることでグローバル課題とローカル課題をリンクさせた。また、難民問題を自分事としてとらえ、かつ、単なる人道主義的な立場から議論するのではなく、多様な立場から議論すべく指導計画を作成した。具体的にはフォトランゲージや動画を取り入れた難民を理解するワークショップを行い、その上で実際に難民支援を行っている NPO 法人 IVY から「難民を知るためのワークショップ」を行っていただき、さらに、同じく NPO 法人難民を助ける会からの講演を行い、難民理解に努めた。そして、受入側の政治的・経済的・環境的・社会的・文化的安全保障の面から問題を整理し、支援における予算的な問題等について盛り込んだ教材を作成したことで、生徒たちは、多面的に問題をとらえ、より緻密で具体的な政策考案につながった。

模擬国連当日は公開授業とし、運営指導委員である拓殖大学国際学部長の甲斐信好先生に

も参観いただき、講評をいただいた。また、次の食糧問題において、合同模擬国連を行う新庄東高校の担当教員にも参観してもらい、イメージの共有と打ち合わせを行った。

５）　食糧問題：合同模擬国連⇒本校研究報告会公開授業

高畠町で有機農業の価値を探究していく「食と健康」プロジェクトを行っていること、このグローカルαで学習している貧困や難民問題にも関係が深いことから食糧問題を単元として扱い、やはり生徒に多様な技能を習得させるために模擬国連を行った。ただし、より難易度を上げ、より積極的な参加の態度を促し、緻密な情報収集と交渉が求められるように基本的にはアウトオブアジェンダをなくし、連携協定校である新庄東高校との合同で模擬国連を行った。論点を整理するために需要と供給の両面での課題についてまとめる教材を作成し、新庄東高校と共有することで生徒たちの学習へのベクトルを合わせた。議長を卒業生と山形大学大学院の学生にお願いし、メンターとして助言にあたってもらいながら模擬国連についてもファシリテートしてもらった。より身近に感じられる大学生や大学院生からの視点は生徒にとって新鮮な学びとなった。さらに議長に 3 年生の代表を加えることで、教員が前に出ることなく、生徒・大学生（卒業生）・大学院生というこれまでとは違った主体者で開催することができた。卒業生と大学院生には生徒が事前に提出した担当国調査シートやポジションペーパーなどをメール等を利用して共有し、資料として助言や会議の進行に役立ててもらった。

（3）グローカルα　成果

年間を通して関連性のあるテーマを単元として選択したことから、学習の進捗に従って、それらのテーマとそのときに学習しているテーマとを関連させながら学習することができた。また、学校プロジェクトと関連のあるテーマであるため、グローバルな課題を学習しながら、この地域ではどうだろうか、あるいは、学校プロジェクトで学習していることはグローバルな文脈の中でどのように位置づけられるだろうか、あるいはグローバルな課題との関連の中で、この地域はどうだろうかと、グローバルとローカルの視点を行ったり来たりしながらそれぞれをリンクさせることができた。また、複合学年での取り組みであったことから、3 年生はリーダーとしての資質が身につき、下級生は 2 年後のモデルを見て、目標を定められるなどの利点があった。

（4）グローカルβ　実施報告

グローカルβでは、1 年次で PBL を行っている。実際には「食と健康」「多文化共生」「子ども食堂」の 3 つのプロジェクトを展開した。2 年次では PPL として、個人での課題研究に取り組み、3 年次では 2 年次の課題研究を英語の論文にまとめる PAL を行っている。
次頁以後、それぞれの実施報告をまとめている。

食と健康プロジェクト

１　本プロジェクトの目的と目標

１．１　目的

「有機農業の聖地・高畠町有機農家から学ぶ「食と健康」のプロジェクト

地域の未来を担う一員としての自覚を涵養するとともに、地域を活性化し、地域課題を解決する主体者としてフィールドワークなどを通して地域の価値と課題を発見し、解決へ向けて行動できる人材の育成を目的とする。

１．２　目標

心身が元気になる本物の食を活用し、地域社会の問題を解決することを目指し、食と健康を伝えるリーダー人材として実践する。今年度は、高畠町地域活力創生プロデューサーの外薗明博氏の指導のもと、和法薬膳研究所の菊地良一氏の理念を正しく理解、共有し、フィールドワークなどを通してその価値を体感し、地域に発信する。

２　本年度プログラム活動内容

２．１　プロジェクト講師紹介（菊池良一氏　高畠町地域活力創生プロデューサー：外薗明博氏）

講話「なぜ今の時代に食と健康を学ぶことが重要なのか」

本プロジェクトのスタートとして、講師の紹介と講話を行った。日本の健康や教育問題、食・日本食の可能性などについて講話を受けた。その他、菊池さんより「薬元米」と味噌の試食を行った。

２．２　第１回フィールドワーク

5 月 16 日（木）に菊地農園にて、健康な土づくりと農業体験をするフィールドワークを行った。

有機農法における土づくりの大切さやその効果、土壌と腸内細菌やそれらと健康の関わりについてお話をきき、良い土から育つ農作物を食べることで健康な体が作られることを学んだ。畑では、ミネラルや細菌を多く含んだ上質で柔らかな土と、農薬によって痩せて堅くなってしまった土を見て触れて体感した。さらに実際に自分たちでも、豆を巻いて農作業体験を行った。

実際に菊地さんの腸内細菌と同じ状況を作り出している良質の土を触ると生徒たちは一様に驚きの声を上げ、その温かさや匂い、柔らかさを感じ、それだけでも良質の栄養価の高い作物が採れることを実感した。また、このような土の貴重さについて身をもって感じることが出来た。

その後、高畠町糠野目にある和楽茶の間に移動し、スタッフの方が作った菊池農園のお米や野菜を使った、地元の伝統的な家庭料理を試食した。試食の際に、素材の説明と家庭料理の作り方について説明を受けた。だれもが笑顔で完食し、顔が見える食事の良さを実感した。試食後、グループに分かれて、畑での体験や試食の感想をもとに、有機農業の良さと課題、また、試食を通した伝統的な食事の良さについて話し合い、グループごとに発表・共有した。生徒自身も今回のフィールドワークでは健康な体と健康な食、そして土の関係性を詳しく学ぶことが出来た。何よりこの体験が食や農、自然への関心、そして学びの意欲を高めた。

後日、学校において、フィールドワークで抽出した課題を分析し、改めて課題を設定し、解決のための方策を考えた。

２．４　第２回フィールドワーク

7 月 11 日（木）にゲンキナの収穫と一汁一菜試食をするフィールドワークを行った。

前回のフィールドワークに引き続き和法薬膳研究所の菊地良一氏の指導のもと、高ミネラル野菜のゲンキナについて学習し、収穫した。その後、和楽茶の間にて、地元の野菜を使った昼食を提供して頂き、生徒自身が収穫したゲンキナを頂く際に、ゲンキナの歴史や栄養について説明して頂いた。実際に食べてみて、そのえぐみなど強烈な味に驚きながらも、かえってそのために栄養価の高さを実感することが出来た。また、菊地さんから、良質の野菜は本来、野菜が本質的に持っている強い味があるとお聞きし、野菜に対する見方が変わった。今回ゲンキナを食べてから花粉症が治ったという事例なども報告され、アレルギーと食生活を見直し、まさに食と健康の関連性について新たな知見を得ることが出来た。食事終了後には、生徒による振り返りと意見交換のプレゼンテーションを作成し、地元の方々と協働して、どのような取り組みができるかについて話し合いを深めた。

２．５　アクションプランの実践

九里祭でのアスリート食の販売を通して、「薬元米」を知ってもらう

8 月 31 日（土）本校の文化祭を利用し、薬元米の普及を図った。実際には、生徒たちが自分たちで考えたアクションプランを実践するために、菊池農園で作られている米で作ったおにぎりを販売した。「超アスリート食」として、菊池農園で作られた「薬元米」にミネラルが豊富に含まれていることや、その米を食べることで得られる効果などを説明しながら販売し、有機農法の価値を多くの人に知ってもらうことを目的として活動した。同時に実践した子ども食堂で提供した薬元米を使った炊き込みご飯をおにぎりにし、約 200 食を販売した。食べた人からは、「玄米は思ったよりも食べやすい」という感想が多く、また、校内での売り上げの他、一般の来場者や中学生にも食べてもらうことができた。このことから、生徒たちは自分たちの活動が実際に有機農法の普及につながるという実感を得た。しかし、同時に実践するための負担感も多く、継続可能ではないため、課題も感じた。

２．６　有機農業作物と健康について講話

「高畠町有機農業作物と健康の関わり」講話

9 月 17 日（月）には、米沢栄養大学健康栄養学部健康栄養学科教授の加藤守匡先生をお呼びして、有機農業作物の栄養価と健康の関わりについて授業をしていただいた。またその栄養と運動の関係性についても研究データをもとに説明をいただき、質疑応答を行った。

２．７　第 3 回フィールドワーク

9 月 26 日（木）に、玄米麹味噌作り、玄米食一汁一菜の調理と試食のぢーるどワークを行った。

3 グループに分かれ、和楽茶の間のスタッフの皆さんや社会福祉協議会の職員の方の指導で、菊地良一氏が生産された有機栽培の大豆を使って玄米麹味噌づくりを行った。作った味噌はビニール袋に入れて各自自宅に持ち帰った。自宅に持ち帰った後は、発酵の段階で色が変わっていくことなどを含め観察し、約 10 か月ねかせることで食べられるようになる。

味噌づくり終了後、高ミネラルな玄米と有機栽培の野菜を使用して、味噌汁を作った。味噌汁に使うだしは、昔ながらの方法で昆布、煮干し、干ししいたけを使い、煮干しのはらわたの部分を取り出す方法も、見せてもらいながら生徒が体験する。だしに使う乾物はそのまま味噌汁の具として取り出さない。野菜は、じゃがいも、たまねぎ、にんじん、インゲン豆、セロリは葉まで使い味噌汁に入れる。添加物を一切使わない、様々な食感を楽しめる味噌汁が完成した。おにぎりは、5 分づき玄米に深炒り玄米を加えたものを炊いて、各自おにぎりを握って味噌汁と一緒に全員で頂いた。

一つの椀に、たくさんの彩り、食感、匂い、味覚が入っており、生徒たちはまさに自然の恵みをいただくことができた。そして、自分たちと自然との関係性を体験的に学ぶことが出来た。さらには菊地さんや

和楽茶の間のスタッフたちは知恵の宝庫、生きる知的財産で、このような体験学習の中で、こういう先代から生きた知恵を教わることは知識の伝播、もっというと文化の継承という点で非常に意義深いと考えられる。

食事終了後は、3 回にわたって行われた食と健康のフィールドワークを通しての生徒が感じた事、考えたことをまとめるワークショップを行った。

２．８　たかはたオーガニックラボでの研究発表

11 月 2 日（土）に高畠町よねおりかんこうセンターで行われたオーガニックラボというイベントに参加し、これまでの成果を発表し、同時に有機農業の価値を発信した。

本校生徒は、「次世代に受け継ぐべき価値観 ・ 食と健康プロジェクト」と題してプレゼンテーションを行った。SDG s を意識した持続可能な置賜地域での人材育成を目的としてこのプロジェクトを進めている点や、実際の畑での収穫体験や土についての講話、味噌づくりと味噌汁の調理、糠野目地区の空き家を活用した「和楽茶の間」での地元食材でつくられた郷土料理の試食など、体験を通して感じた食と健康の価値、学び感じたことを伝えたいという目的をもって活動をしている点を中心に発表した。さらには担当教員がこのラボにおいて、本プロジェクトの教育的効果等についてプレゼンテーションを行い、地域との協働によって成しえる教育の可能性と、食農教育の価値について発信し、また、パネルディスカッションのパネラーとして加藤教授、有機農家らと参加した。

※たかはたオーガニックラボは、高畠町の有機農業についてさらに広く認知してもらうためのイベントである。1973 年から始まった高畠町の有機農業に従事する若手有機農家を中心に、今年度から立ち上げた実行委員会が主催している。「体が元気になる食」を目指して安心、安全な食べ物づくりに寄与し広めていくためオーガニックラボが開催され、初回の企画として、以下のようなプログラムが行われた。

２．９　付属幼稚園や地元大学での調査

12 月 27 日（金）にはこれまでの研究内容を踏まえて、地域では食についてどのような取り組みをおこなっているのか、付属の幼稚園で調査を行った。地元の畑で作られている食材を使用したおかず給食を採用することで、バランスの取れた栄養価の高いものを幼児に食べさせることができるということや、園内に調理スペースを充実させ、指導内容に成長段階に合わせた食の教育が取り入れられていることがわかった。園の敷地内には畑もあり、子どもたち自身が育てたものを収穫・調理しみんなで食べることで、幼少期より食へ関心を高め、食を通して豊かな人間性を育むことを目的としていることがわかった。また、地元にある山形県立米沢栄養大学での学生の研究と実験内容についても大学の研究室を訪れ、聞くことができた。1 月に菊池農園で作られた「薬元米」を使用したオリジナルメニューを 1 週間食べることで血液の成分がどのように変化するかを実験する内容について説明を受け、質疑応答などを行った。

３　成果と課題

生徒たちが外薗さんや菊池さんの指導のもと、フィールドワークを通し、地域の食の課題について考えることができた。また、その課題と解決方法について、九里祭での販売、たかはたオーガニックラボでの発表を通し、発信することができた。さらにその様子を地元の新聞に掲載していただいたことで、その認知は高まったと言える。生徒も菊池さんをはじめ、和楽茶の間のスタッフの方々との交流をとおして、地元の魅力や価値を体感し、食の大切さとそれを継続可能なものにしていかなければならないという活動の意義を自覚できた。目標としていた、地域の食の課題について考え、地域に発信できたことは成果として挙げられる。また、高畠町の、この教育活動への関心が高まり、町としてもよりいっそう協働してこの教育活動を添加し、地域創生につなげようとの気運が高まった。

一方で、有機農業の普及や後継者問題などを解決するにあたり、その価値の裏付けが弱く、今後の課題となった。

子ども食堂プロジェクト

１　本プロジェクトの目的と目標

１．１　目的

地域の未来を担う一員としての自覚を涵養するとともに、地域を活性化し、地域課題を解決する主体者としてフィールドワークなどを通して地域の価値と課題を発見し、解決へ向けて行動できる人材育成を目的とする。

まずは子ども食堂をオープンし、数回開催することを目標とすることで、子ども食堂についての意義や運営のためのプロセスを知り、本格的な九里子ども食堂開設のためのノウハウを得る。また、どのような人々、企業を支援者として巻き込むと有効なのか、体験的に知り、今後の持続可能な子ども食堂について一考する。

１．２　今年度の目標

自分たちで具体的な子ども食堂（以後くのりキッズ食堂）の意義や目的、内容を考え、実質的な運営方法を周囲の協力や指導のもとに考案し、月に一度のオープンすることを今年度の目標とした。

また、米沢市の人々、特に社会的弱者となっている家庭へ発信し、認知してもらうと同時に、広報活動の方法について良案を得る。

２　本プロジェクトのリサーチクエスチョン

① 子ども食堂の意義は何なのか？（先行文献などから調べて分かることを脱却し、自分たちでその目的を考え、運営をしてみた体験やアンケート調査などから考察）

② 持続可能な子ども食堂の運営にはどのような手法が有効なのか（方法論の模索）

３　本年度プログラム活動内容

３．１　スタートアップ講話（NPO 法人ゆあら女性支援ネットワーク代表の竹部氏による講話）

５月３０日（木）に子ども食堂を地域で実際に実施している NPO 法人「ゆあら」の代表である竹部氏を招いて講話を行った。竹部さんは米沢市で DV 被害者支援や DV 被害の環境で育った親子のコミュニケーション、刑務所出所者の社会復帰のお手伝い、子育て支援など、女性支援の活動家であり、この地域でも定期的に子ども食堂を実施している。アイスブレーキングから始まり、貧困問題を解決するためになにをするべきなのかという行動計画書をグループで考えた。貧困を解決するための一つの手法として、子ども食堂に着目し､「誰を協力者としてお願いするのか」･「誰が主体者となるのか」･「誰をターゲットとするのか」など竹部氏のアドバイスのもと生徒たちは熱い議論を交わした。その後竹部さんより､「幸せはお金ではない。お金はなにかを得るための道具であって、お金を得るのが目的ではない。幸せとは心の豊かさなんだと思う。」と、支援の中で実際に出会った子供たちを例に挙げながら、生徒たちに語り掛けた。くのりキッズ食堂の目的を生徒達が主体的に感じながら、目標設定を行った。

３．２　くのりキッズ食堂プレオープン

子ども食堂運営上の課題発見・運営方法の体験的学習及び、連携体制の強化を目的とする。また地域の子ども食堂に対する認知度を高めるため､各報道機関にも働きかけながら行う｡また食事提供だけでなく、来店した子どもたちと一緒に遊びなどを通してコミュニケーションをとることで、今後定期的開催予定の子ども食堂へ再度足を運んでもらえることを目標に行った。学校全体の本事業や子ども食堂への理解促進と地域への波及効果を図り、本校の文化祭で九里キッズ食堂を開催することとした。

食材費用として、８月２３日（金）に、米沢駅や伝国の森にて生徒主体で募金活動を行い、11,119 円を集めた。子ども食堂自体の認知度が高く、多くの人に励ましと応援の声を頂戴したようだった。

８月３１日（土）に１１時から開催した。少しでも栄養価の高いものを提供したいという思いと、高畠町での「食と健康」プロジェクトで取り組んでいる菊地農園の有機食材の普及を図りたいというねらいから、食堂のメニューは高畠で有機農業を行っている菊池良一氏から高ミネラル米の薬元米及びゲンキ菜を購入した。炊き込みご飯とゲンキ菜のおひたし、そしておから入り肉団子を提供した。５０食を準備し、提供したところ２時間弱で完売した。来場者内訳は大人２７名、子ども２３名であった。予想を上回る来場者で、予定よりも１時間以上も早く完売した。また来場者の大人からは『薬元米ってどんな米？』や『炊

き込みご飯や肉団子のメニューを教えてほしい』など、提供料理についても好評を得た。次回子ども食堂の告知もスムーズに行うことができたため、次回につながる開催であった。資金調達から調理、提供、告知まで生徒が行ったため、達成感及び自己有能感の高まりを実感できた。

３．３　NPO 法人ゆあら実施の子ども食堂へのフィールドワーク

9 月 21 日（土）に竹部氏が実施しているゆあら元気子ども食堂へのフィールドワークを行った。くのりキッズ食堂開催の実現に向けて、ゆあら主催のパン作り教室に参加することで、開催の手伝いをし、運営の経験値を得ることができた。プレオープンで行った九里キッズ食堂での取り組みとの違いを体験し、今後のキッズ食堂の方向性を考える機会となった。また生徒たちが子どもたちを関わりながら、触れ合う楽しさを実感し、次回への動機づけを高めることができた。

３．４　NPO 法人ゆあら実施の子ども食堂へのフィールドワーク　第 2 回

10 月 8 日（土）に第 2 回フィールドワークを行った。本格的なくのりキッズ食堂の実現に向けて、ゆあら主催の子ども元気食堂をお手伝いしながら参加することで、どのように実施しているのか実際に見て体験し、必要なスキルを学んでいくことを目標とした。

事前申し込みをしている参加者がいなかったが、飛び込みの参加者が２組あった。うどんなどほとんどの料理が出来上がったところで、小学生２名を連れたお母さんと、１歳と２歳のお子さんを連れたお母さんの参加があり、参加者の子供たちもうどん生地の型抜きなどを体験した。調理・配膳、後片付けも生徒自身が考えて次々と行いスムーズな運営に貢献することができた。

また開催と同時に地元誌の「あづまーる」の取材でゆあらの特集記事として本校生徒にインタビューや写真撮影が行われ、掲載された。この記事の反響が大きく、くのりキッズ食堂が広く認知されたようである。

３．５　くのりキッズ食堂本実施

12 月 21 日（土）に本校を会場にくのりキッズ食堂を初開催した。

２か所の学童から土曜保育の児童たちがまとめて参加したことで、直前の集計で、想定を超える参加者数となった。そのため、予定していたメニューを変更するなどの工夫をして対応し、ゆあらの竹部氏も、参加者増に対応して、寄付による食材を追加してくださった。先述のように地元誌に掲載されたことや、事前にチラシを作成・配布した成果もあり、来場者は合計 74 名に上った。受付もスムーズに行うことができ、臨機応変な対応で参加者が楽しめる環境作りを行うことができた。提供メニューはチキンライス・照り焼きチキン・サラダ・コンソメスープ・ホットケーキ（ホイップクリームとフルーツ）であった。

食後は参加者とともにスポーツやゲームなどを行い、親睦を深めることができた。

４　成果・課題

今年度目標であった、くのりキッズ食堂を開催できたことは成果であった。また地元誌に掲載されたことや、新聞に取り上げられたことなどもあり、地域への発信も同時に行うことができた。生徒達にとって、地域を巻き込んだイベントの企画や運営が、大きな挑戦であったが、同時に大きな達成感を与えるものでもあった。

運営資金や食材の調達方法や運営方法などより持続可能な運営にはなにが必要なのか、そしてどのように実現させていくかが課題として挙げられる。

学校プロジェクト　多文化共生プロジェクト

１　本プロジェクトの目的と目標

１．１　目的

地域の未来を担う一員としての自覚を涵養するとともに、地域を活性化し、地域課題を解決する主体者として外国人居住者との対話を通して外国人の声を聴き、彼らが抱える本当の課題を知り、彼らと協働で新しい共生社会の在り方を考える。

１．２　目標

外国人居住者とともに、地域の課題解決を目指した活動を行う。また、その活動を通して、外国人居住者が真に地域社会を構成する一員として市民参加できるような社会を創成する。

２　本年度プログラム活動内容

２．１　第１回グローバル・カフェ

6 月に本校にて、米沢市や置賜地域での多文化共生について考えるため、米沢市国際交流協会の国際交流員でイギリス出身のカニング・マーカス氏をお招きして、米沢市における多文化共生の現状についてお話し頂いた。

カニング氏を中心に、台湾、モロッコ、マレーシア出身の山形大学の留学生 5 名も参加して、出身国や文化の違う住民が、米沢市や置賜地域で暮らす際に起こる困りごとや、お互いの違いを尊重して、より良い町づくりに生かしていくアイデアについて考えた。

日常の問題だけでなく、災害時の伝達方法についてどのような手段をとればうまく伝えられるかなど、グループごと話し合い、発表・共有した。生徒は、初めて外国人目線での課題に気付くことができ、自分たちにもすぐに取り組める身近な方法を考えることができた。

２．２　第２回グローバルカフェ

7 月に本校にて、第 2 回のグローバルカフェを行った。台湾やモロッコ出身の山形大学の留学生に参加してもらい、地域での生活のしにくさや希望についてグループごと話し合った。また、地域の方々にもっと外国の文化を知ってもらいたいと考え、九里祭で何ができるのかを留学生とともに話し合った。生徒たちは、自分たちの目線だけではなく、文化も習慣も違う外国人がこの地域で生活する上での課題に向き合い、また彼らとともに生活することがともに理解しあい、助け合うことであるということが重要であると考えた。九里祭に、向けて 8 月末までに、来場者に向けてそれぞれの国の文化を紹介したり、ゲームを行ったりするための準備をした。

２．３　第３回グローバルカフェ（九里祭での活動）

２回のグローバルカフェを通して、地域にも外国人居住者が多くいることをそれぞれの国の文化を知ってもらうことで認知してもらう活動が必要であると考え、九里祭で異文化紹介のコーナーを設置した。山形大学の留学生や置賜地域在住の ALT 数名が、事前準備や当日参加をしてくれた。同時に開催した、食と健康プロジェクトのアスリート食販売や、子ども食堂とのスタンプラリーを計画し、ゲームなどを通して、生徒や来場者と交流を行うことができた。

２．４　第４回グローバルカフェ

米沢市国際交流員のタイラーさんをお招きして、米沢市の抱える外国人居住者の課題について、質疑応答やグループごとの話し合いを行った。この中で、ごみ捨てのトラブルや飲食店でのメニュー表記の問題について考えた。生徒たちは、外国人向けの説明のほとんどは英語であることを知り（続いて中国語、韓国語）、少数ではあるが、その他の言語を母国語とする外国人には目を向けられていないことを感じた。たとえ少数であっても、災害時や事故、病気の際には、迅速で安全な対応が求められる。共生社会を考える上で、自分たちができることや公的機関での取り組みの不足を実感し、どのような解決策があるのかを考えた。

この回を受けて、生徒たちが再度話し合い、今年度クラスで交流したアメリカからの短期留学生（1 週間程度の短期留学を受け入れ）の経験談の中から、彼女が通院の際に困難を抱えていたことを思い出し、一方で、外国人を受け入れる側にも困り感があるのではないかとの仮説のもと、市内の病院での外国人への対応について調査することとした。

２．５　調査①

米沢市立病院での取り組みについて、直接病院スタッフへの聞き取り調査を行った。対応してくださった病院スタッフの方から、外国人の年間受診者数やその際の対応などについて伺うことができた。相対的な人数は少ないものの、通訳や受診後の支払いの問題が多いことを知った。特に通訳は常駐しておらず、英語のできるスタッフに頼ることになることや、未払いのまま帰国してしまうことなどが問題であり、その解決がシステム化されておらず、現場の対応に任されていることに課題を感じた。通訳の問題については、現場の声をもとに多言語対応の機器を導入したという例も知った。

２．６　調査②

本校に在籍している中国人生徒３名にインタビューを行った。同年代の高校生が、この地域に住んでどのように感じているのか、意識調査を行った。最も大きな問題は、やはり言語の問題。十分に話せない状態で来日し住んでいるため、意志の疎通が難しく、授業だけでなく普段の生活の中でのコミュニケーションも取りにくく大きなストレスを感じているということがわかった。また、このインタビューを通して、学校生活を送るうえでの環境や周りの対応も改善の必要性を実感することができた。

２．６　研究発表

12 月に公益財団法人山形県国際交流協会主催の国際理解実践フォーラムにて、ポスターセッションを行った。調査を通して、米沢市が多文化共生推進を目指す上で、整備がまだ不十分であることがわかり、特に医療面や心の健康面において、言語だけでなく価値観や考え方の違いから外国人居住者が、共生しやすい街にする必要性について発表した。また、生徒たちはこの発表を通して、多くの意見を得ることができ、異文化理解に興味や関心のない人をどのようにして巻き込むかをより具体的に考えることが大切であると感じた。

３．成果と課題

山形大学工学部に在籍している留学生との交流を通して、生徒たちが異文化理解の大切さを身近に感じ、多文化共生とは何なのか、自分たちが住む米沢市が多文化共生社会になるためにはどうしたらよいのかを、主体的に考えることができた。市の国際交流員や本校に在籍している外国人生徒に直接話を聞いたり、市立病院で調査をしたりしたことで、実際にどんな取り組みが現場で行われており、それが外国人居住者にとって本当に有益なのかを考えることができた。

一方、調査において、十分なデータがとれなかったことや、医療・福祉の面だけでなく、より幅広い視野で多文化共生社会をとらえる必要があったことが課題である。また、多文化共生について、先行研究にあたったり、発展している都市との比較研究を行ったりと、研究手法に甘さがあった。また、外国人留学生だけではなく、技能実習生など労働者として居住している外国人をどれだけ巻き込み、多様な立場の意見をいかに反映させられるかが課題である。さらには外国人もまちづくりの主体者となるための仕掛けなど、協働のあり方も課題としてあげられる。

2年PPL「課題研究」

九里学園高等学校では、1965年から卒業研究として3年次に「自主研究」を課してきた。現在は、これまでの知見をより発展し、2年次にPersonal Project Learningとして「課題研究」に取り組んでいる。基本的には1年次でのグローカル・ラーニングにおいて各自が見いだした課題をテーマとして研究を進めることで、テーマ設定を円滑にさせるねらいがあったが、実際には生徒の興味は多岐にわたり、研究テーマの設定に多くの時間を費やした。このPPLはハワイでのフィールドワークをカリキュラムの中に取り入れ、グローバルな視点から考察できるよう配慮している。

【2019年度プログレスコース2年「課題研究」指導課程】

時期	内容	生徒の取り組み	教員の指導
1年	SDGsを柱として貧困問題や食糧問題など世界の問題について生徒同士が学年縦割りでグループディスカッション、ワークショップ、模擬国連などを行いながら個人で課題研究を進めていくための素地を養う。	世界で起きている問題を自分事として捉え、その解決のために自分にできることを本気で考える。	具体的な情報を与えることで、生徒たちが自ら気づき考え、主体的に行動し、成長できるよう助言する。
2年 4月	岡本尚也著『課題研究メソッド ~よりよい探究活動のために~』をテキストとして、課題研究の進め方について具体的に説明。	自分の興味関心と社会課題の重なる部分にどんな課題があるか考える。	個別面談をしながら生徒の興味関心と社会課題を結び付けるためにアドバイス。
2年 5月	2年生1人につき、課題研究テーマが近い3年生2~3人が付き、ゼミ形式で自分のテーマを説明し、アドバイスをもらいながら、テーマを具体的に生徒自身が研究できるように掘り下げていく。	個別に3年生や教員の指導を受けながら、情報をインプットし、具体的なテーマを設定する。	プログレスコースの教員5名がそれぞれの生徒と肯定的に対話し、生徒の考えを引き出し、焦点を絞る。
2年 6月	自分のテーマに関する先行研究論文をGoogle Scholarなどを利用して調べ、テーマに関する知識を得るだけではなく、研究の仕方を学ぶ。 仮説を立て、研究手法を考え、研究計画を立てる。	先行研究を参考にして、自らのテーマを掘り下げて、具体的な研究計画を立てる。	先行研究や関連する書籍を紹介しながら、できるだけ生徒がテーマを掘り下げやすいよう具体例を示す。
2年 7月 8月	夏休みを利用し、研究計画に基づいて、校内外におけるアンケート調査、インタビュー調査、現地調査、ワークショップなど具体的に研究を進める。	各自、課題研究専用ノートに研究内容や考えたことなどを記録する。	生徒と外部の間に入り、課題研究への協力依頼や具体的なアドバイスをする。
2年 9月 10月	これまでの研究結果をまとめ、考察し、中間発表を行い、他者と共有する。互いに参考にし合いながら自分の課題研究について再検証し、今後の計画を立てる。	これまでの研究を振り返り、考察し、プレゼンテーション資料を作成する。	まとめ方と発表の仕方を教え、生徒同士の学び合いを大切に指導する。
2年 11月	10日間のハワイ研修旅行に行き、環境問題や貧困問題などの研修プログラムを通して、自らの課題研究テーマをグローバルな視点で考察し直し、現地のグローバル教育スタッフに英語で課題研究プレゼンテーションを行い、フィードバックをいただく。	自らの課題研究テーマを意識して、ハワイ研修プログラムに参加し、考察を行い、英語で課題研究プレゼンテーションを行う。	ハワイ研修を通してグローバルな視点で自らの課題研究テーマを見直させ、自分の課題研究の意義深さと重要性を自覚させる。
2年 12月 1月 2月	外部の全国高校生フォーラムや探究型学習発表会にて英語ポスターセッションや英語で発表などを行う。 研究報告会にて個人課題研究発表（英語でプレゼンテーション、英語や日本語でポスターセッション）、課題研究ポスター作成。課題研究論文完成。	プレゼンテーション資料、ポスター、論文の作成を通して、自分の課題研究を整理し、アウトプットする。	論文作成や発表の指導の中で、一人ひとりの生徒の限界を超えさせ達成感と自信を持たせる。

【2019 年度「課題研究」発表】

期日	研究発表会名	生徒氏名	発表内容
2019.9.11	九里学園高等学校創立記念式典	鈴木　茉衣	食育~親子のコミュニケーション~
2019.12.14	山形国際理解フォーラム	堀越　貴璃 宮田　耕平	フェアトレードと倫理的消費 ～フェアトレードタウンを目指して～
2019..12.22	SWG 全国高校生フォーラム	堀越　貴璃	Fair Trade Campaign in Kawanishi Town （英語によるポスターセッション）
2020.1.11	地域未来を拓く若人フォーラム	髙橋　蒼	Save the planet using Organic Food （英語によるプレゼンテーション）

生徒たちは、当初テーマの設定と研究を進めていく方法がわからず大変苦慮していたが、一度テーマが決まると大変意欲的かつ自主的に地域協働を意識して学校外の方々にアンケートやインタビュー、ワークショップを行った。生徒たちの感想を聞いてみると「社会は厳しい！」ということであった。課題研究を通して「社会」と向き合う方法を学んだ生徒たちは、自分の考え方をしっかりと持って話したり行動したりすることができるようになり、驚くほど大きく成長した。
５名の生徒が２月のグローバル・サミットに参加し、研究成果を英語で発表する予定であったが、残念ながらコロナウィルスの影響で台湾の生徒へ向けて発信し、さらにフィードバックをもらうことができなかった。

【参考文献】『課題研究メソッド ~よりよい探究活動のために~』岡本尚也 著　啓林館

The Spread of Halal Food

Fuwa Ito

Introduction

The Tokyo Olympics and Paralympics will be held in 2020. Japan needs to consider what measures are necessary to support the increase in the number of foreign tourists. Japanese people have low awareness of multiculturalism. Japan should tell foreigners about Japanese culture but Japan also has to improve the food infrastructure so it can accommodate people with different food needs and be able to prepare various kinds of meals. Specifically, for people who come from other Asian countries who often visit Japan. This study focuses on Yonezawa City where the author lives and the expected economic effect by the provision of such meals in the city. In this research Halal food was chosen from many kinds of meals.

Purpose of This Research

To achieve food diversity, it is necessary to consider and grasp the present situation in the city. The research focuses on Halal food in order to spread this. This study uses an interview and a questionnaire to achieve this.

What is Halal

The Japan Food Barrier-Free Association says that "Halal" means "permittable" in the Arabic language. "Haram" is the opposite word. What objects constitute Haram is decided by how an animal is slaughtered, processed and so on. This research is focused on just Halal food.

Preliminary investigation

・**research question**

Are there things that study abroad students get upset about?

Does Yonezawa City have an appropriate food infrastructure?

・**result of interview**

There are few stores that sell Halal food, so study abroad students can't eat meat bought in Japan. "Washoku" or Japanese food often contains "mirin" which is made from alcohol. So, these students can't enjoy Japanese food.

・**discussion**

Yonezawa city deserves recognition by changing Yonezawa beef that is the specialty of the city to comply with the guidelines of halal food from foreign countries. So, it is thought the city will become known better, which in turn adds value to the beef. By doing so, tourists from within Japan or foreign countries is thought to increase as the city will become more famous.

Main Research

・**research method**

My class start a Halal branch at the school festival. Questionnaire about the degree of recognition and bias of Halal food.

・**research question**

Is the degree of recognition of Halal low?

Is there bias of Halal?

・**question contents and results**

Q1: Do you know about Halal food?
A1: Yes-28% No-72%
Q2: What is your impression of Halal food?
A2: Good-7% Bad-7% Not sure-86%
Q3: How do you feel after eating Halal food?
A3: Delicious-77% Ordinary-23% Not Delicious-0%
Q4: Has your impression of Halal food changed?
A4: Yes-74% No-26%

Conclusion

The Degree of recognition of Halal food is low, as the opportunity to know about it might be few. One reason for this is that information concerning Halal isn`t taught in elementary or secondary education. Furthermore, there are problems not only with the impression of Halal but also the impression of Islam. Additionally, the impression of Halal became better by offering a choice of Halal food to people.

References

Japan Food Barrier-Free Association
Japan Food Barrier-Free Association HP
<www.halal.or.jp/ 2019.1.18>

The Activation of Nagai's agriculture by Rainbow Vegetables.

Rana Yokoyama

Introduction

Recently, many rural areas are in decline in Japan. So most local governments are taking actions to stimulate their towns. Nagai city where the author lives focus is on this local activation. Various groups in Nagai are increasing their activities year by year to stimulate this town.

As population and industry are still in decline. These problems are difficult to solve.

According to such conditions, the author carries out this study to highlight the positive points of Nagai City and communicate this information nationally in Japan.

Previous Studies

Nagai city carried out a questionnaire to people living in Nagai city.

The first question was,"Is it your intention to live in Nagai city from now on?" 71.7% of the people answered "Yes." And 13.9% of the people answered "I will live in Nagai for the time being." According to the results, more than 80% of the people intend to continue living in Nagai in the coming future. The reasons are good environment and delicious water.

Second question was, "Is there communication between you and your neighbors?" 84.9% of the people answered "Yes." This result shows us the strength of Nagai's community spirit.

Presently Nagai City is carrying out the "Rainbow Plan". It is a project to encourage the sustainability of Nagai. Waste products of organic materials are converted into compost and used in the production of vegetables.

Purpose of This Research

The appeal points of Nagai city are good environment and delicious water. This information is supported by previous studies. So, this study focuses on revitalization of agriculture. And the purpose of this research is suggesting a new strategy that will publicize these points nationally as a main feature of Nagai City living. In addition to that, this research mentions about the strength of Nagai's community's spirit.

It is important for Japan to revitalize rural areas like Nagai City as there is an abundance of a natural supply of fresh water, air, energy and food.

Research Question

Is agricultural industry active in Nagai City?

Result

The interview was conducted in Nagai City Hall. The author interviewed the employees of the agricultural section of Nagai City Hall.

Question 1

What are the advantages and disadvantages of farming in Nagai city?

They said, "One advantage is delicious water. However farmers can't sell their products outside of Nagai City as local products of Nagai, so this is one disadvantage."

Question 2

How do you sell the products of Nagai to urban areas?

They said,"it is difficult to sell them easily as they are not well known by people living in urban areas".

Question 3

What is good about Nagai`s vegetables?

They said,"Rainbow Vegetables are grown locally in Nagai. Compost is produced in Nagai and used to grow these vegetables. Therefore Rainbow Vegetables have high nutritional value."

Question 4

What are the present problems of the agricultural industry?

They said,"It is the difficulty of improving the recognition of Nagai`s Rainbow Vegetables."

Discussion

This interview shows a problem that the vegetables of Nagai can't be sold as local products of Nagai in urban areas. And also, there is no specific measure to improve the recognition of Rainbow Vegetables.

According to these results, it is important to focus on how to improve the recognition of Rainbow Vegetables in urban areas in this study. And also, Nagai`s sustainable activities can be more recognized in urban areas by improving the recognition of Rainbow Vegetables. People in urban areas may be interested in Nagai as a result. So, it leads to not only introducing the new appeal of Nagai but also re-introducing the already known positive points of Nagai. Also by doing this, Nagai City`s agricultural industry will be revitalized and the recognition of Nagai's desirability in urban areas will be improved.

Suggestion

According to this study, the author suggests a service that Nagai City delivers locally grown natural food to people in the local area and urban areas. Various types of Rainbow Vegetables, local specialty vegetables and

traditional food of Nagai and Yamagata prefecture. Knowledge of vegetables and local specialties which are less common and well known can be shared. A pamphlet of Nagai city should also be included.

The customers would be people from Nagai or Yamagata, parents who have children living in urban areas and people who are interested in Rainbow Vegetables and natural food. And in turn these customers will promote these products to their friends. By doing so, people from Nagai or Yamagata play a key role in publicizing the goods and become a medium of advertising. And also, Nagai City can use the people who were originally from Nagai and moved to urban areas. Moreover, Nagai City can use the appeal and the strength of its community to promote its products by sharing information, called "Osusowake" in Japanese.

Finally, the effects of this service on Nagai will be that the city can publicize its appeal to people in urban areas. Also Nagai City can sell Rainbow Vegetables to them by improving the level of recognition of these products. This service will have an effect on the agriculture industry in Nagai and customers can benefit from the knock on effect of Nagai's Rainbow Plan system.

Reference

Questionnaire of Nagai City to residents
2017.5
<https://www.city.nagai.yamagata.jp/>

For Multicultural Growth of Yonezawa City

Introduction

Recently, a growing number of foreigners are coming to Japan. Is Yonezawa City a livable place for foreigners? To solve this question, the research investigates the current situation and how the city will become an attractive city for foreigners.

Purpose of This Research

The research was undertaken in order to make clear how Yonezawa City could become a multicultural society.

Research Question

Are foreigners living in Yonezawa city having troubles?

Result

The questionnaire was conducted with the help of study abroad students from Yamagata University.

Question1
What should be written in English at restaurants?
The answer was to write the menu in English and show photos of the cooked food.

Question2
What trouble do you have in restaurants?
The answer was that they couldn`t read the menu especially the Chinese characters, Kanji. Also there is often no button to call a clerk.

Question3
What kind of service do you want at restaurants?
The answer was to be able to make reservations by using a cell phone application, and to be able to choose Japanese food according to religious preferences.

Question4
Where should information be presented in English in the city?
The answer was at restaurants, supermarkets, government offices and pharmacies.

Question5
What kind of information do you want at the time of a disaster?
The answer was learn the location of the evacuation site, how to prepare an evacuation bag and the type of disaster unfolding.

Question6
How do you want the information conveyed at the time of a disaster?
The answer was E-mail, the official Facebook page of Yonezawa city, TV, and through the Yamagata University webpage.

Question7
Do you know of the hazard map?
The answer was most people didn’t know.

Question8
Do you know Yonezawa City has a hazard map?
The answer was no one knew.

Conclusion

Yonezawa City has insufficient policies for supporting foreigners. Yonezawa City should write hazard maps not only in Japanese but also in English.
Yonezawa city provides disaster information only on the internet. However, Hachioji city provides various information not only on the internet but also on paper. Yonezawa City should do the same.
A new approach is needed for Yonezawa City to achieve multicultural growth.